



長特研だより

122号

発行 長崎県特別支援教育研究会
事務局 長崎県立希望が丘高等特別支援学校
編集局 長崎大学教育学部附属特別支援学校
発行日 令和5年2月1日

今回は、「第56回 九州地区特別支援教育研究連盟 研究大会<沖縄大会>」の報告をいたします。オンデマンド配信がされておりますので、ここでは簡単な報告といたします。

なお、全国大会(秋田大会)は、参加者が県内限定、分科会は紙上開催となったため、こちらにつきましては、後日記録DVDが本研究会に送られる予定になっております。必要に応じてお問い合わせをお願いいたします。

第56回 九州地区特別支援教育研究連盟 研究大会<沖縄大会>報告

1. 期日: 令和4年11月10日(木)、11日(金)
2. 概要: オンライン開催、後日オンデマンド配信



<記念講演>

「一人一人の子どもの自立と社会参加を見据えた教育課程の在り方」

長崎県教育庁特別支援教育課 課長 分藤 賢之 氏

- ・各校がカリキュラム・マネジメントを進めるにあたっては、教育課程編成の基準の理解を深めることがまず大事。学習指導要領に示されている「用語」を正確に理解することで、校内検討会でのスムーズな進行につながる。
- ・学習指導要領に示す「内容のまとまり」について理解することが大切。そして各校において、「内容のまとまりごとの評価規準」を作成していく必要がある。
- ・指導と評価の一体化のために、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、評価の場面や方法を工夫することが重要。
- ・児童生徒の残りの在学時間を見通し、何をどこまで指導するか、卒業までに育成する資質・能力を整理し、それらを重点的に指導するといったトップダウンの視点が重要。
- ・特別支援学校は、教育内容の選択や授業時数の配当、指導目標・内容の設定における自らの判断の可否を、卒業後の視点による評価に基づき検証することが特に重要。
- ・長崎県島原市において、「就労支援フォーラム」を開催した。企業と生徒とのマッチングの機会、職場実習以外にも特別支援学校生徒の力を知ってもらう機会、企業側の採用意欲を高める機会になればという思いがあった。
- ・企業側から求められることは、「対面でのコミュニケーション能力」。卒業後の業務遂行、就労継続のために、育成すべき資質・能力を踏まえた各教科、自立活動など、卒業後の視点による評価に基づき検証することが重要。
- ・自立と社会参加を見据えた、学びの一貫性・系統性を実現するために、特別支援学校と小中学校との情報交換の場が重要。そして社会との連携及び協働において実現させていくものである。

<シンポジウム>

<シンポジウム① 知的障害教育における教育課程>

「共生社会の実現に向けたすべての子どもたちの可能性を引き出す学びの実現をめざした教育課程の在り方を考える」

司 会：沖縄県立大平特別支援学校 校長 大城政之

話題提供者：鹿児島大学教育学部附属特別支援学校 教頭 上仮屋祐介

沖縄県立大平特別支援学校 主幹教諭 平良錦一郎

熊本県立熊本支援学校 教諭 古川伊久磨

長崎市立伊良林小学校 教諭 土橋美咲

指定討論者：長崎県教育庁特別支援教育課 課長 分藤 賢之

- ・児童生徒の学びに基づいた学習評価と授業改善に向けて、授業研究の充実・工夫を行う。
- ・単元等の総括的評価と年間指導計画の評価改善の流れとつながりを明確にする。そのことで、教員一人一人の自己関与の芽生えにもつながる。
- ・一貫性・系統性の意識、教科横断的な視点を踏まえるために、単元配列表の作成、整理をする。このことで、他教科を理解、意識して取り組むことができるようになる。また、使用教科書を学部を越えて把握することも重要。
- ・単元配列をする際に、各教科のつながりを確認するためにコアとなる教科や行事等を柱に考えていくことは有効と思われる。
- ・研究を進めるにあたって、「めざす姿」や「育てたい力」などを指導計画等に明示することはよくあるが、各校において、その力そのものを指導するのではないということを全職員に十分に伝える必要がある。
- ・幼児期から就労へ向けて関係機関の連携が重要。地域の小中学校の特別支援学級と特別支援学校高等部をつなぐ連続した教育課程の実現のために、年度末の文書の引継ぎだけでなく、授業参観や学習プリントの把握などのネットワークづくりも非常に重要。

《シンポジウム② 知的障害教育における ICT 活用》

「GIGA スクール時代の特別支援教育における ICT 活用」

～学校と行政、両方の立場から考える～

司 会：沖縄県立総合教育センター 指導主事 知念元喜

話題提供者：大分県教育庁特別支援教育課 指導主事 桑野稔

北九州市教育委員会特別支援教育課 指導主事 宮里祐輔

宮崎県立日向ひまわり支援学校 指導教諭 飯干知子

佐賀市立小中一貫校松梅校 教諭 木田啓二

指定討論者：帝京大学教育学部初等教育学科 教授 金森克浩

- ・行政機関においては、環境整備が重要である。
- ・各校において、ICT 機器活用のスペシャリストの育成、活用を図る。
- ・活用事例の収集をする。また、HP で情報公開する。
- ・教員の活用機会を増やす。またスキルの向上を図る。
- ・子どもの学びを保障する機会を確保する。
- ・授業づくりに少し ICT をプラスする意識をもつ。
- ・もてる力+ICT 機器の活用で自信をもたせる、もてる力を拡張していくアプローチが重要。
- ・ICT を普及させていくために、基本の考え方の発信、事例の紹介、情報の紹介を行う。
- ・動画サイトの紹介、オンライン動画の活用など、ネットワークを有効利用する。

<分科会>

	提案者と主な内容	指導助言
1 日常生活の指導	<p>1. 熊本県立松橋西支援学校 教諭 前嶋礼王</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題行動に目を向けるのではなく、その行動の理由や気持ちなどの内面の部分に注目した。 ・好き、楽しめる活動をきっかけにして課題に取り組む機会を増やした。日常生活においてできることが増えてきた。 <p>2. 福岡県宗像市立東郷小学校 教諭 島本由佳</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入学期の児童に対し、スモールステップでの課題設定や、成果を視覚的に捉えられるようにしたこと、いろいろな生活場面で連続して支援できるようにしたこと、子どもの達成感を引き出すことができた。 <p>3. 豊見城市立とよみ小学校 教諭 伊敷清香</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交流学級での活動を増やすため、支援学級において「安心基地」の設定やスケジュールの視覚化、スモールステップでの課題設定等を行い、安心して交流学級での活動に参加することが増えてきた。 	<p>熊本県教育庁特別支援教育課 指導主事 木下敏英</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3校とも、子どもが今何ができて、どのようにすれば成長するかを考え、子どもに合わせた取組がなされている。また、子ども自身が考えて行動できるように工夫し、習得したものを生活場面で生かす様子も見られた。 ・すばらしい実践であることは間違いないが、今回の実践は、自立活動の実践とも言える。子どもの心身の調和的発達を培うためには、各教科の内容と自立活動を学ぶことが大前提。日常生活の指導と自立活動については各校で整理が必要と思われる。 <p>沖縄県立宮古特別支援学校 校長 下地靖子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3校とも、子どもの強い部分を生かし、弱い部分に配慮がなされた取組がなされている。また、効果的な支援方法も、それぞれ ICT 機器の活用、コミュニケーションボードの活用、専門家への相談など工夫されている。今後も継続してほしい。
2 生活単元学習	<p>1. 大牟田市立大牟田特別支援学校 教諭 彌永亮輔</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チャレンジ…成功だけでなく失敗もする。失敗は悪いことではないことを指導した。 ・学校探検を通し、新入生を案内することで、達成感を味わえる経験を繰り返した。 学級目標をその都度確認、振り返ることで、自信をもつことができた。 <p>2. 唐津市立竹木場小学校 教諭 北口定吉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理科や家庭科など、いろいろな教科と関連させて進めた。食について、体験学習を通して、生活の一部としての「食」に関心をもち、学んだことを実生活に生かすことができた。 <p>3. 浦添市立神森小学校 教諭 池原さつき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの特性や活動に合わせた扱いやすい教材や教具を準備し、様々な経験をさせた。 ・野菜を育て、売り、作るという一連の活動を通して、育てることの楽しさや難しさを知り、助け合う力を育むことができた。 	<p>大牟田市教育委員会学校教育課 指導主事 寺本健彦</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2校とも、児童生徒が期待をもち、見通しをもって活動に意欲的に取り組むものであり、課題の解決に向けた取組がなされていることが評価できる。 ・2校とも、各教科等の内容を関連させたまとまりのある学習展開がなされている。 ・各教科等を合わせた指導を行う場合は、指導計画の中に何の教科のどの内容であるかを明示すること、各教科等で学んだ知識、技能等を般化させるという意識をもつことが重要。 <p>沖縄県立島尻特別支援学校 校長 中山充雄</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちに提案させ、創意工夫を引き出し、自信をつけさせることができています。 ・子どもと関わる際の三つのポイント（目配り、気配り、心配り）を大事に。

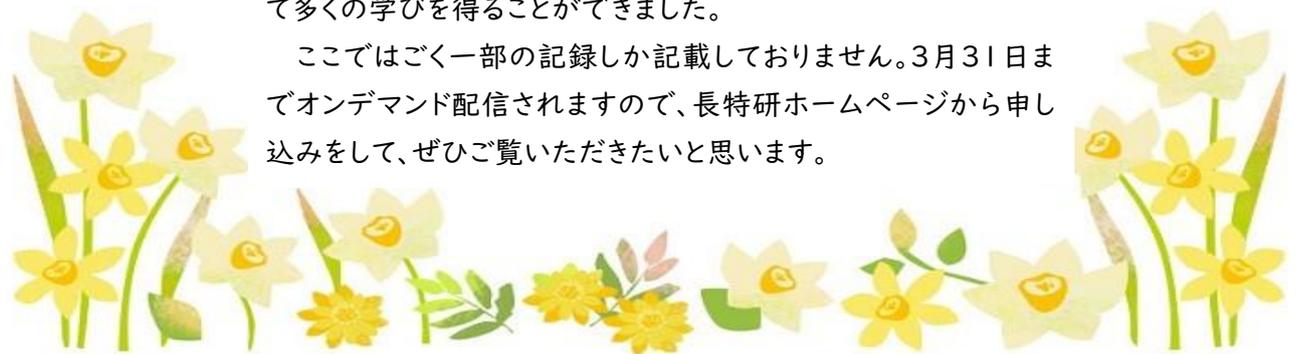
<p>3 教 科 別 の 指 導</p>	<p>1. 佐賀大学教育学部附属特別支援学校 教諭 永石浩・後藤滋夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 好きな絵本を ICT 機器を活用しながら、みんなの前で発表し、また読み聞かせをすることで、絵本の学習に意欲的に取り組むようになった。 <p>2. 諫早市立森山東小学校 教諭 松藤由美</p> <ul style="list-style-type: none"> アンプラグドプログラミング教材を使ったことにより、自分で考え、試行錯誤して取り組む姿が見られるようになった。そして日常生活の場面でも、うまくいかないときに自分で何とか課題を解決しようとする姿が増えてきた。 <p>3. 宮古島市立平良中学校 教諭 楚南沙織</p> <ul style="list-style-type: none"> 部活動での活躍を関連させた題材（短歌、作文）を用い、複数の教師との信頼関係が生まれ、情緒を安定させて学習に取り組むことができるようになった。 	<p>佐賀県教育庁特別支援教育室 指導主事 岡本欣吾</p> <ul style="list-style-type: none"> 単元計画が工夫されている。 実態に応じたワークシートを使用することで「完成する」達成感が味わえるようになっている。 苦手な部分を補い、主体性を引き出す ICT 機器の活用を。 <p>・子どもが学びに向かうように「仕組む」ことができている有意義な取組。</p> <p>・子どもの思考・判断、課題解決力が高まったことは間違いない。教科「算数」として、どのような力が育ったかを確認してもらいたい。</p> <p>沖縄県立美咲特別支援学校 校長 粟國静夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 担任以外の先生と信頼関係を築くことができるように、他の先生方に向けて生徒の特性や指導の在り方についてアプローチしたことが有効であった。
<p>4 作 業 学 習 ・ 進 路 学 習</p>	<p>1. 長崎県立虹の原特別支援学校 教諭 平山拓也</p> <ul style="list-style-type: none"> 実習報告会後の意見交換会で課題点、困り点などを話し合うことで意識向上。専門教科の中でも生徒主体の話し合い活動を多く取り入れた。 これまで離職者がいない→関係機関との連携（卒業後のアフターケア）、在学中にワーク・ライフバランスについて指導している。 <p>2. 豊後大野市立清川中学校 教諭 佐藤久枝</p> <ul style="list-style-type: none"> 年間を通して農園作業を行ったことで、見通しをもって、また意欲的に取り組むことができた。周りからの感謝の言葉を受け、自己有用感の高まり、自信につながった。自分で考えて動くようになった。 <p>3. 沖縄県立大平特別支援学校 教諭 新垣賢悟</p> <ul style="list-style-type: none"> 「校内の問題解決を図る」ことを学習の意味付けとし、自分や他者のために活動できたことや賞賛を受けたことが、喜びややりがいといった自尊感情の高まりにつながった。 	<p>長崎県教育庁特別支援教育課 係長 中尾敏光</p> <ul style="list-style-type: none"> 適切な学習評価の実践があったと思われる。 様々な実習の実施、専門教科から各種実習への般化へとつながっている。 PDCA サイクルを適切に見直し、教育課程の改善を図られていることが伺われる。 同じ学校に、普通科と職業科があるが、その違いについて聞いてみたい。 得意なことを生かした学習内容の設定、学ぶことへの意欲を高めたことが印象的。 自分を振り返り、自己実現への力、なりたい自分の現在の位置の把握をさせていることがよい。 自尊感情測定尺度というツールを使って、評価しづらい自尊感情の高まりに向けた取組が良かった。 <p>沖縄県立沖縄高等特別支援学校 校長 城間政次</p> <ul style="list-style-type: none"> 作業学習は、各教科等を合わせた指導。各教科の内容を整理し、どちらの指導形態で行うにしても、実践を振り返り、学習評価を踏まえ、改善を図ることが重要。 定着率について。その子の人となりをしっかり理解して高等部3年間話し合っただけで子どもが理解したうえで就職させることが重要。 知的障害がある子どもの可能性を広く考え、今後は就職だけでなく、大学進学も考えていく時代に来ているのではないかと。

5 自 立 活 動	<p>1. 大分県立日田支援学校 教諭 三重野綾</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの幅を広げるため、視線入力装置を活用した。それにより、自分の意思を自分から伝えることができるようになった。また、一定の教師だけでなく、他の生徒や教師ともやり取りができるようになった。 <p>2. 日向市立平岩小中学校 教諭 加塩祐子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の興味・関心を生かした学習内容の設定によって自己肯定感が高まり、責任をもって任された活動に取り組むことができるようになった。 ・「暴言ブレーキ」を常時掲示し、本人が自分で気付いたり、振り返ったりすることで暴言が減ってきた。 <p>3. 沖縄県立はなさき支援学校 教諭 立津佑美</p> <ul style="list-style-type: none"> ・太田ステージや LC スケールのテストバッテリーを行い、課題を明確にしたことで、自立活動で取り組む課題を絞ることができた。これにより教師間の連携した指導につながった。 ・国語科と自立活動を関連させて指導できたことにより、「話す力」の変容を引き出すことができた。 	<p>大分県教育庁特別支援教育課 指導主事 伊達洋介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入力装置を用いた活動は、本人と教師との関わりで終わってしまうことが多いが、それを周囲の生徒とのコミュニケーション手段として活用していることで生活への汎化につながっている。 ・活動の中で、行動の意味付け、即時性をもった指導がなされ、受動的な会話から能動的な会話へつながっている。 ・ICT 機器の活用については、本人にとって有効性があり、児童生徒の意思を尊重することを大事にしていきたい。 ・ICT 機器活用の最大の利点は因果関係がわかりやすいこと。「ヒト、モノ、コト」を見定める視点を大事に。 ・自己を肯定的に捉える活動、児童が興味をもって主体的に取り組む、成就感を味わうことができる活動になっている。 ・本人が主体的に改善・克服したいという気持ちがあって取り組むことが重要となる。 ・自立活動は、その時間だけでは完結しない。他の授業時間や生活場面で効果が出ているかという視点を。 <p>琉球大学大学院教育学研究科 准教授 城間園子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実態把握について、根拠のあるアセスメントをしっかりとしている。それに加えて、日頃の子どもの行動の観察も重要になってくる。 ・具体的な評価基準を国語科と関連させて示してあるのはよい。子ども自身が目標達成に対する評価ができなければ主体的な取組にはつながっていかない。子ども自身が「できた」「よかった」と自己評価できるようにすることが重要。
6 交 流 及 び 共 同 学 習	<p>1. 宮崎県立みやざき中央支援学校 教諭 山口弘高</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校高等部生と高等学校陸上部生が、パラリンピアン講演を聞いたり、一緒にスポーツをしたりした。また、パラリンピック採火式に向けて一緒に火起こしを行う中で、共に活動する達成感と一体感が生まれた。 <p>2. 沖縄県立島尻特別支援学校 教諭 知花朝彦</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農林高校生と共に、バードコール作りや鶏卵の集卵、袋詰め及び職業班体験作業などを行い、話す機会が増え、また交流したいという変容につながった。 	<p>沖縄県立はなさき支援学校 校長 濱元伸</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2校ともに、高校生になっても共生社会に向けた交流学习が途切れることなく、それぞれの学校の特性を生かしながら、生徒たちが共に、主体的に活動する好ましい事例である。 ・交流及び共同学習は、関係者双方が、十分に話し合い、計画的に準備を進めていくことが大事である

<p>3. 鹿児島市立田上小学 教諭 徳留敦</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自立活動において、児童の自己肯定感を高めるための手立てと自分から発信できるようにする手立てに取り組み、交流学級において自ら助けを求めたり、交流学級児童からも働き掛けたりする様子が見られた。 	<p>宮崎県教育庁特別支援教育課 指導主事 戸敷こずえ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交流学級の環境を整えることをスタートとしたことで、児童自らが必要性を感じて取り組んだことが良かった。 ・自立活動で SST を行い、身に付けたことを交流学級での学習場面に生かすことができていることに大きな成果があったと思う。
<p>7 自閉症発達障害への支援</p> <p>1. 鹿児島県立鹿屋養護学校 教諭 大坪佑徳</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情緒が不安定で、他害行為が見られる生徒に対し、職員間や支援機関で支援方法を共有した。また、個別学習室などの環境整備、PECS や ICT 機器を用いた教材の工夫等行い、情緒の安定につなげることができた。 <p>・ 2. 水俣市立水東小学校 教諭 元山典一</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動に対する不安感があり、登校渋りもある児童に対する支援について。本人の困り感を聞き取って少しずつ軽減していき、本人の達成感につながっている。 <p>3. 沖縄県立宮古特別支援学校 教諭 池田健児</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同僚間 SV を用い、一人の子どもに対し、職員間で目標、支援方法の検討などを頻繁に行い、指導にあたった。絵カードコミュニケーションによる取組で、意思の表出の向上が見られた。 	<p>鹿児島県教育庁特別支援教育室 指導主事 福山利克</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個別の教育支援計画は関係機関との連携で大事なツールである。支援目標は具体的に、絞ることが重要。 ・福祉機関で行われている支援方法のノウハウを学んで取り入れていくことは重要。 <p>沖縄県立西崎特別支援学校 校長 與儀達子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者とのやり取りも良いが、子ども本人にどうしたいかを聞き、選ばせることも良いのではないかと。 ・自閉症の子どもの行動の原因を考えることが重要。紹介する文献にわかりやすく示されているので、ぜひ参考に。 ・特性として、順序よく記憶できず、今起きている現象だけを捉えるということがある。 ・自閉症といっても、特性は一人一人違うので、子どもの実態を把握するために、いろいろな手段、ツールを試すことも重要。

記念講演及びシンポジウム、そして各分科会と、それぞれにおいて多くの学びを得ることができました。

ここではごく一部の記録しか記載しておりません。3月31日までオンデマンド配信されますので、長特研ホームページから申し込みをして、ぜひご覧いただきたいと思ひます。



【長特研ホームページのご案内】

この「長特研だより」も長特研ホームページでご覧いただいている方が多いと思ひます。下記のアドレスのほか、右の QR コードでスマートフォンからも入ることができますので、ご活用ください。

URL <https://choutokuken.com>

